

ピエール＝ロラン・エマールの“ピアノの技法” ——“フーガの技法”を中心に

Mousiké 編集室 (Art-Phil)

J. S. バッハの「フーガの技法」に触発された本プログラムは、ピエール＝ロラン・エマールその人による“ピアノの技法”の体現でもあった。「カノン」(抜粋)を機軸としてE. カーターの「2つのダイヴァージョン」、O. メシアンの「8つの前奏曲」(抜粋)が、また「コントラプンクトゥス」(抜粋)とともにL. V. ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第31番」が対置される。各作品は時代様式を超えて相互参照されることで、多様な解釈を湛えることとなった。

冒頭で演奏された「コントラプンクトゥスI」。透徹に響く単音には、純粋な音列から対位法が生まれ、カノンへと展開する契機がみられた。「2つのダイヴァージョン」では、カノンの間隙にヘテロフォニーが交叉し、その背後に蠢く無数の旋律が暗示される。「8つの前奏曲：風の中の反射光」では、明確な音色の弾き分けが2主題間のアンティフォニックな唱応を誘い、最後部で上行する連打音はその凝集と衝突を輝かせる(なお、メシアンの諸作品はアンコールでも演奏され、超人的な冴えをみせていた)。

その衝突の残響とともに、「コントラプンクトゥスX」での2重フーガの充実した展開はディアフォニックに響き、「コントラプンクトゥスXI」の音列(B-A-C-H)はヘテロフォニックな錯綜感を漂わせる。そして、圧

巻の「ピアノ・ソナタ第31番」が本プログラムを総合する。第1楽章・経過部の軽快なアラベスクには、緩やかに散逸する「8つの前奏曲：夢の中の触れ得ない音」の音塊群を想起させられ、第3楽章・導入部後の浮遊感ある「嘆きの歌」では、「2つのダイヴァージョン」でのヘテロフォニックな旋律が調性を帯びて再現されているかのようですらあった。

あるいは、重厚な和音の連打と分散和音の強度。音と音の間に生まれる純粋な共振から、フーガの鏡像が生まれ、歓喜に満ちた旋律が歌い上げられる。そう、ソナタ形式という弁証法において、バッハ、カーター、メシアン、ベートーヴェンらの対話は奇跡的に成立していたといえよう。音に沿って音を。音列間の多様な関係性を明晰に聴取し、豊かに倍音を含んだ打弦をもって時間を彫琢すること。その類稀な演奏スタイルにおいて、ピエール＝ロラン・エマールによる“ピアノの技法”の本質が体現されていたといえよう。

最後に、ホール内のプレートに刻まれた武満 徹の言葉に、本プログラムの英雄の姿を見出したことを付記する——「できれば、鯨のような優雅で頑健な肉体をもち、西も東もない海を泳ぎたい」。音楽史の海を悠然と泳ぐこの巨鯨から、私たちは目を離すことができない。■

ピエール＝ロラン・エマール ピアノリサイタル (2008年7月15日)
東京オペラシティコンサートホール (タケミツメモリアル) [東京都新宿区]
ピエール＝ロラン・エマール (Pf)

- ①フーガの技法 BWV1080 (J.S. バッハ) コントラプンクトゥスI
- ②同 3度音程でも転回可能な10度のカノン
- ③2つのダイヴァージョン (E. カーター)
- ④フーガの技法 BWV1080 (J.S. バッハ) 5度音程でも転回可能な12度のカノン
- ⑤同 反進行における拡大カノン
- ⑥8つの前奏曲 (O. メシアン) 第2曲 悲しい風景の中の恍惚の歌
- ⑦同 第5曲 夢の中の触れ得ない音
- ⑧同 第8曲 風の中の反射音
- ⑨フーガの技法 (J.S. バッハ) BWV1080 10度音程でも転回可能なコントラプンクトゥスX
- ⑩同 転回可能なコントラプンクトゥスXII.1
- ⑪同 コントラプンクトゥスXI
- ⑫同 転回可能なコントラプンクトゥスXII.2
- ⑬同 12度音程でも転回可能なコントラプンクトゥスIX
- ⑭ピアノソナタ第31番変イ長調 Op.110 (L.V. ベートーヴェン)